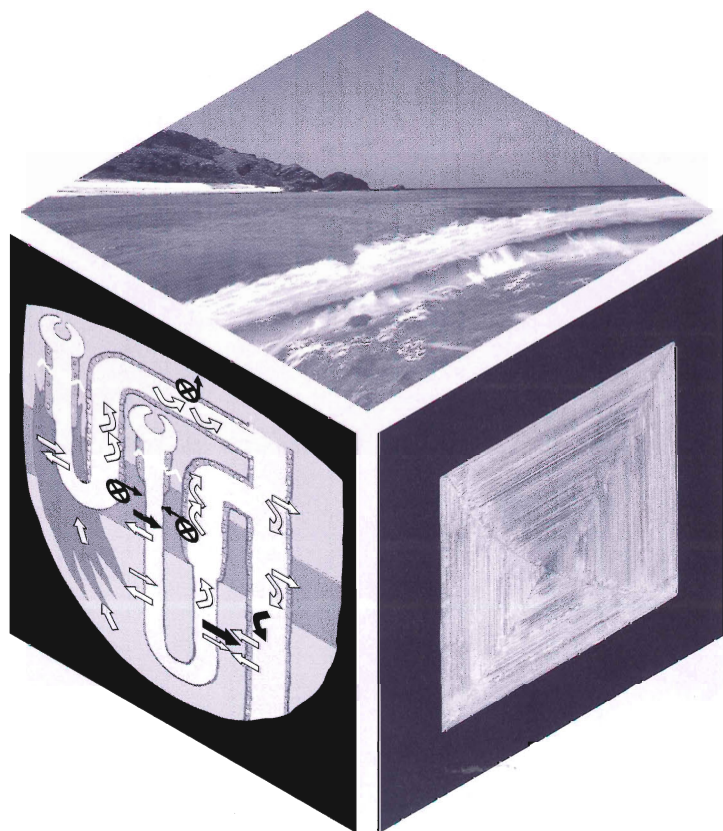


市場ニーズにマッチした品質保証へ 熊谷 博

古書とのふれあい 太田健一

山国からの塩の便り 杉田静雄



# 目次

巻頭言 市場ニーズにマッチした品質保証へ 1

---

熊谷 博

古書とのふれあい 2

---

太田 健一

山国からの塩の便り 5

---

杉田 静雄

塩漫筆 <sup>たくあん</sup> 沢庵 12

---

塩 車

第2回理事会・第2回評議員会を開催  
第3回理事会・第3回評議員会を開催 17

---

財団だより 24

---

編集後記



熊谷 博

日本食塩製造株式会社  
代表取締役社長

公益財団法人ソルト・サイエンス  
研究財団評議員

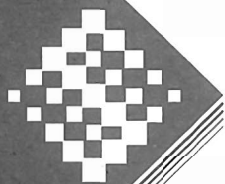
## 市場ニーズにマッチした 品質保証へ

当社は1949年に設立し、大蔵省専売局から家庭用塩等の製造委託を受けて、「再結晶法」による高純度塩を製造するとともに食卓塩等を納入してきた。1997年に塩専売法が廃止されて新たに塩事業法が施行されたことで自由に販売することが可能となったが、それまで業務の大部分が受託製造であったため、品質保証に関する自社独自の基準や手順を持ち合わせていなかった。そのため新たな品質保証体制が必要となり、2000年10月「ISO9000品質マネジメントシステム(94年版)」の認証を受け品質保証体制を構築した。日本適合性認定協会のデータによると、当社が認証登録した時点では国内の認証登録件数は約1万5千件であったものが、2008年末には4倍強に増加し産業界に定着してきている。

しかし品質マネジメントシステムが定着したと言えども、食の「安全・安心」を揺るがす不祥事が新聞紙上を賑わした記憶は、我々

食品業界に携わる者として残念な出来事である。当社は「品質に自信を持ってお客様に対応出来るしっかりした体制を持ち運用する」ことが企業責任を果たすための最大の手段であると位置付け、現場で活用し易いシステムの構築を目指して取組んできた。品質マネジメントシステム導入当初は、必要なマニュアル類を作成し、活動結果の記録を残すことに追われ、業務量も増加したことから品質マネジメントシステム推進を負担に感じる声もあった。認証登録から2年後の更新審査時には「ISO9001品質マネジメントシステム(2000年版)」へ移行し、「経営者の責任」「資源の運用管理」「製品実現」「測定分析及び改善」に関する要求事項が強化されたことにより、「経営者の意思」を具現化する方向に変わり、より経営と連動したシステムとして「責任と権限の明確化」、「顧客重視」への考え方が浸透してきた。また、内部監査の実施等によるボトムアップとPDCAを回しながらスパイラルアップする体制を強化することにより、品質保証体制が定着向上し10年目を迎えた。

ISO9001が定着した後、2005年から日本薬局方塩化ナトリウムの製造許可取得に向けて取組み、2007年11月に薬事法省令に定めた「製造管理及び品質管理規則(GMP)」に基づく医薬品製造許可を神奈川県から受けた。GMPは薬事法に基づく許可要件であり、一方ISO9001は第三者機関の認証により効力を発する制度である。両者とも公的な基準であるが、単に規格・基準の決めごとを順守するのみではマンネリ化し、品質の維持改善に繋がらずシステムを導入した効果は薄らぐ。メーカーとして顧客第一主義を全うするため、生産活動の基本である5S管理の徹底により活動の活性化を図り、管理面はISO9001とGMPの手法を適用して日々品質保証体制を進化させ、塩事業法時代にマッチした品質保証体制を構築することにより、お客様に「安全・安心」な製品を提供し続ける考えでいる。



# 古書とのふれあい

太田 健一

日本塩業研究会代表

昨年11月に入って、京都の臨川書店から古書案内が届いた。その中に『家憲正鑑』という、きわめて気になる書名を見つけたので早速に注文書を送った。本体価格は4千円、発刊は大正8年、それ以外は著者も頁数も不明であるので、やや不安ではあった。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

数日後、本が送られてきた。手にとったところ随分と重量感があった。B5版、総頁701頁、著者は北原種忠、発行所は家憲制定会(麹町区飯田町4丁目3番地)、初版発行は大正6年7月20日であるが、大正7年11月に再版、大正8年5月に3版発行をしており、当時において大いに人気が出たことが想像される。

あらためて眺めてみると、藍色の装いで、天金がほどこしてある。最終頁をめくると、奥付があり、その右頁が白紙であるが、左下に2つの立派な角印が上下に押されている。上部に「参考室所蔵」(タテ5.5cm、ヨコ2cm)、その下に「飯田元締」(タテ、ヨコとも



所蔵者印鑑(原寸大)

に4cm)の朱印が鮮明である。これから推定すると、高島屋参考室が所蔵していたと思われるが、飯田元締がはっきりしない。参考室の長たるポストが「元締」で、その人物が飯田ということであろうか。それとも、高島屋参考室に続いて、次の所蔵者となった人物が飯田元締ということであろうか。その場合、大正期において元締という役職はどのような組織にあったのであろうか。浅学の小生には四苦八苦する悩ましい問題である。



『家憲正鑑』の著者北原種忠は近代日本社会において名をなした富豪51家、江戸時代に到るまでの武将・学者39名の家憲・家訓・遺訓・座右銘を採録している。史料採集には井上角五郎・井上通泰両氏の支援をうけたことも明記している。

富豪51家の中には、筆頭に三井・岩崎・渋沢・安田・住友・藤田・鴻池の政商・財閥が並び、そのあとに本間・市島家などの巨大地主、片倉・森村家などの企業家が続く。詳細にみていくうち、「野崎家の家憲 — 岡山県・野崎武吉郎」の項を見出した。そこでは次のように紹介されている。

山陽道随一の素封家として、塩業家野崎武吉郎氏の名は、普く世人の耳にする所、当主は初期議會以来、貴族院議員に歴任し、徳声名望両つながら高し、而して同家の今日を致したる所以は、現代の祖父武左衛門氏に源を發し、子孫能く父祖の意を体して、其の制定に係る家憲を守り、業務を励みたるに因る。乃ち同家の家憲は経世の一端として、世に紹介する価値あるや疑を容れず。

野崎家の創業者たる武左衛門翁の遺訓、その後継者である武吉郎氏についての塩業家・貴族院議員の紹介は傾聴に値するが、いま現在の小生にはいささかの不満がある。その第1は、明治33年以降において野崎家を取り組んでいた台湾塩業に関する紹介が欠如していることである。そして、その第2は「家憲」として紹介されている武左衛門翁の「申置」7か条が不十分であることである。

「申置」7か条は、昭和56年公刊された『備前児島野崎家の研究—ナイカイ塩業株式会社成文史—』にその全文が紹介され、近年では第3条「無益と思ふわざには、つとめて金銭を費やさざるやう心懸くべし、公共の利益あることにはいさゝかも吝むべからず」と、第5条「身代少しにても不如意とならば、世間に隠しだてをせずして速に仕法を立つべし(後略)」の2か条が脚光を浴びている。すなわち、第3条は公利公益主義を唱えており、これが現代の企業メセナの精神につながっていること、第5条は現代の組織の粉飾ぶりを否定し、情報公開を求める在り方につながっていること、すなわち、コンプライアンスとの関連で評価が高まっている。

幸いに「家憲正鑑」では第3条が第4条として、第5条が第6条として紹介されてはいるが、元の「申置」の第2条と第6条が削除され、その2か条文は元の第1条が分割されて引用されるという重大な過失を犯している。著者を含め、史料収集に協力したという井上角五郎・井上通泰先生の責任も軽くはない。

なお、念のために申し添えれば、「申置」第2条は「新なる事業を企て財利を得んとする計画はなすべからず、たゞ固有の身代を減らさじと心懸くれば自然増殖するものぞ」、第6条は「一家の主人たるものは好き嫌ひのなきやうに慎むべし、好き嫌ひは偏頗を生ずる本ぞかし、多くの人を召使ふ身は別けて心得べきことなり」というものである。



昨年、筆者は野崎家塩業歴史館の国西事務長・宮崎学芸員と共に台湾を訪問した。目的は明治33年から昭和12年に到る37年間に亘って布袋(ほてい)塩田を開発・経営した野崎台湾塩行の事績を調査するものであった。

台湾の古老たちの話では、台湾の近代化事業に貢献した日本人実業家では、岡山県の野崎武吉郎と奈良県の土倉庄三郎の評価が高いという。野崎家は勿論、塩業の分野であるが、土倉家は山林業、治水・道路事業での貢献という。恐らくは、両家とも事業の遂行に当っ

て地元住民の意見をよく聴き、その利益をはかっていった姿勢が歓迎されていったものと思われる。

その土倉家の家憲が詳しく「家憲正鑑」に紹介されている。吉野木材や吉野川開通事業をはじめ同家の慈善徳行の数々が判明するが、残念ながら台湾での事績は一切ふれられていない。野崎家・土倉家に共通してみられる台湾での事績が脱落していることが「家憲正鑑」の欠点かも知れないが、また逆手をとって、本書をてがかりにして日本国外との関連性を歴史的に追及することが必要なのかも知れな

いと思っている。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

昨今の俳句ブームに因んで、松尾芭蕉の家憲的なものは『家憲正鑑』ではどのように記載されているか。芭蕉の座右銘は「ものいへば くちびるさむし あきのかぜ」であるという。芭蕉はつね日頃、「昨日の発句は今日の辞世、今日の発句は明日の辞世」と語り、「我れ生涯に云ひすてたる句は、一句として辞世ならざるはなし」と言い切ったそうである。まさに、一期一会の生き方と云うべきか、考えさせられる文言である。



# 山国からの塩の便り

杉田 静雄

工学博士

## 1. はじめに

筆者は本誌にこれまで数回寄稿する機会を得て、故郷山梨のかつての塩の道<sup>1)</sup>、(社)山梨科学アカデミー<sup>2)</sup>などについて述べてきたが、本稿では最近2年間に、山国の山梨では極めて稀な「塩の考古学研究集会」<sup>3)</sup>が開催され、山梨科学アカデミー賞本賞に、初めて塩関連の「省エネルギー型食塩電解技術の開発研究」<sup>4)</sup>が選ばれたので、これらについて概要を紹介し、エコに関連する山梨の近況を付記する。

## 2. 塩の考古学研究集会

山梨県考古学協会は設立30年を迎える、会員200余名の民間研究団体であり、遺跡発掘調査、定期総会、記念講演会、各種の研究集会などを行なっている。一昨年、笛吹市にある帝京大学山梨文化財研究所大ホールを会場として、2日間にわたりこの集会が開催された。そのテーマは“ゆく塩、くる塩、古代の塩とその流通を考える”であり、構成は基調講演、研究報告6件、パネル討論であった。

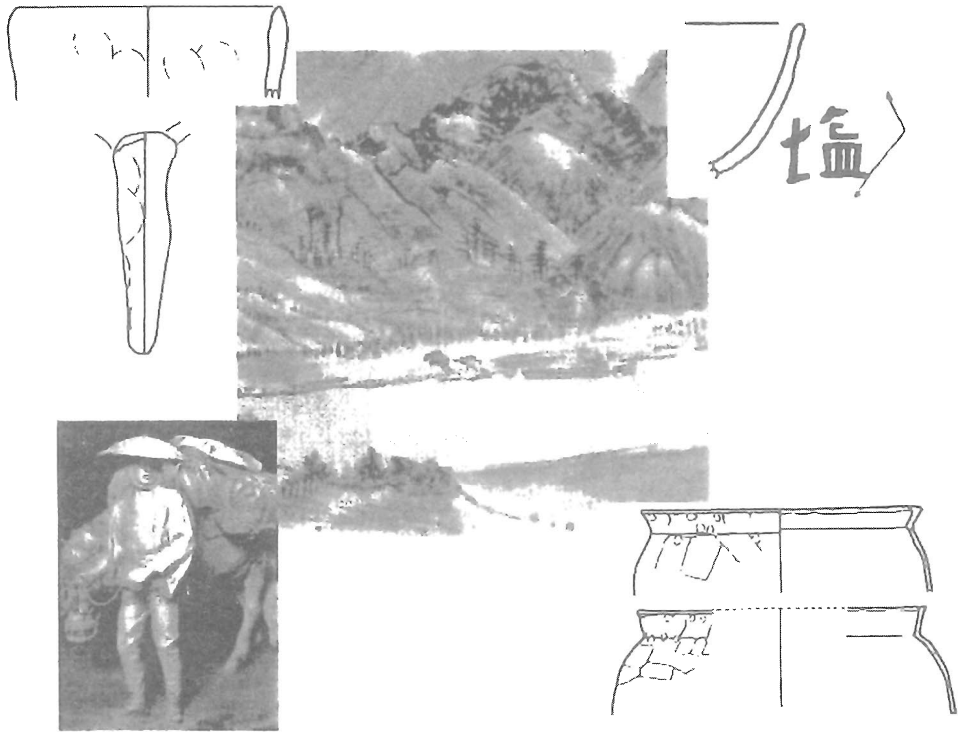
それらの内容は図1に示す上製のA4版100頁の資料集に、かなり詳細にまとめられているが、主に古代東国の塩づくりと流通についての、考古学的研究の成果が発表された。それらについて概要を述べる。

基調講演は岸本雅敏氏(塩業考古学者)の「塩の考古学—古代東国社会と塩」であったが、最初に塩の考古学と題した集会はわが国では初めてであること、この分野の文献は少ないこと、研究を進める上での難点の一つに、塩が溶けやすいものであるため、発掘しても塩が出てこないことを述べ、塩の考古学の研究が遅れている一因であると話された。続けて以下の項目について講演された。

山梨県考古学協会 2007年度研究集会

# 塩の考古学

—ゆく塩、くる塩、古代の塩とその流通を考える—



2008

山梨県考古学協会

図1 研究集会資料表紙



- ・塩の考古学の国際情勢
- ・西日本の塩
- ・東日本の塩
- ・古代東国社会と塩をどうとらえるか

欧州や中国の塩の考古学誌や内外の名著の紹介、わが国の延暦年間(780～800年)の日本紀略、続日本紀などの塩関係史料の説明があったが、古代漢文のため筆者には十分に理解することはできなかつた。また、テレビなどに取り上げられている喜平島や師楽式の塩づくり、ニューギニアの貨幣としての塩の塊などにも触れられた。資料には古代の製塩土器出土分布図、延喜式にみえる調庸塩の貢納図など興味深いものが多く、講演は筆者に考古学の価値と奥深さを再認識させた。

研究報告の概要を以下に記す。

#### 1) 塩からみた古代地域間交通、鈴木景二(富山大学)

この報告は、これまでの古代交通史の研究が、都と各地域の官人と税の往復交通についてのものであり、今後の考古学的研究が文献史料や古代の日常生活を、地域史の視点から研究し成果をあげることに多大の期待を抱いていること、そしてこの視点から塩を指標とした「塩および魚の移入路」(田中啓璽・1957年 古今書院)、「古代国家と塩流通」(岸本雅敏・1998年 小学館)を取り上げて展望した。

また、「日本霊異記」などから古代においては正月用品を求めるための元手として、馬・布・柿・塩が用いられ、能登半島に多くの製塩遺跡があるのは、佐渡金山の金の精錬で夾雑物の銀を塩化物として除去するために、多量の塩を必要としたことなどを述べた。

#### 2) 内陸部における塩の流通と消費—甲斐国を中心に—、向山八重(早稲田大学大学院)

この報告は、「六国史」「続日本記」「日本書記」などに見られる塩の記事の内容を、塩に対する人々の意識、塩の移動と輸送手段、甲斐国と塩の項目で整理し、古代にも塩の摂取は日常的な行為であり、摂取できないと支障

をきたすことを認識し、これらの点から塩の無駄な消費は社会的に認められないものであったという。

塩の輸送手段としては河海とも舟を利用し、陸上は人・牛・馬・車の利用を確認している。甲斐国の塩の項目では塩の消費・塩地・流通について述べ、消費量の最大は人件費(サラリー)であり、貢進物の鹿の乾肉づくりや牛馬に与える塩にも消費されたことを推論している。塩地については後記の6)山国の塩に述べる。

この報告は、はじめに記した筆者の甲斐国の塩の道の一般的な記述と異なり、学術的な61件の文献と46点の史料を含む充実した内容の、故郷の塩の古代史の研究であった。

#### 3) 栃木県と周辺地域の古代製塩土器、浅野仁(財・とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター)

この報告は、これまで周辺地域を含む栃木県では、搬入された製塩土器についての研究が少なく、1996年を前後する時期から、製塩土器の様相が明らかになったことを踏まえて、土器の系譜や搬入方法、塩の生産と交易の関係を周辺の茨城県、福島県、宮城県を含めて検討したものである。

この地方には8世紀前後に筒型平底の製塩土器が初現したが、地域によって土器の高さや口径に変化があること、塩の生産は当時の国司や官衙による一種の官営工房で、口径約6尺の煎鉄釜などを用いて行なわれたことなどを、10頁にわたる約200図を資料として報告している。

#### 4) 東国湾岸地域における製塩関係遺構・遺物、田尾誠敏(東海大学)

この報告は、山梨県に近接する東日本の太平洋湾岸地域の製塩遺構・遺物の最近の研究成果を、出土した製塩土器特に三浦型甕を中心に、既往の研究を含めて考察したものであり、取り上げた地方は房総半島、伊豆諸島、三浦半島、静岡県西部である。そして、三浦

半島および鎌倉地域で中心的に出土する三浦甕を、製塩専用土器として捉えることに否定的であり、房総市や大島などで製塩専用土器として出土した、バケツ型深鉢型の土器を出土地や形態の専門的考察から、三浦半島などの製塩専用土器と推論した。

この報告には図2の関東地方の遺構・遺物を検出した遺跡図をはじめとして、25頁にわたって土器の形態などの図を示し、1980～2007年間の50件の文献をあげている。

5) 地方官衙遺跡と塩、田中広明(財・埼玉県埋蔵文化財調査事業団)

この報告は、古代国家の地域支配の拠点と塩とのかかわりと、関東地方の海産物の移動と地域間交流のあり方について検討したもので、塩と官衙、内陸と海浜の交流の項目で整理した。前者については塩の木簡は調庸国以外では認められず、税として調達した塩が財政や財源として、給与・贈与・交易など種々の目的に用いられたことを、若狭の塩・伊勢

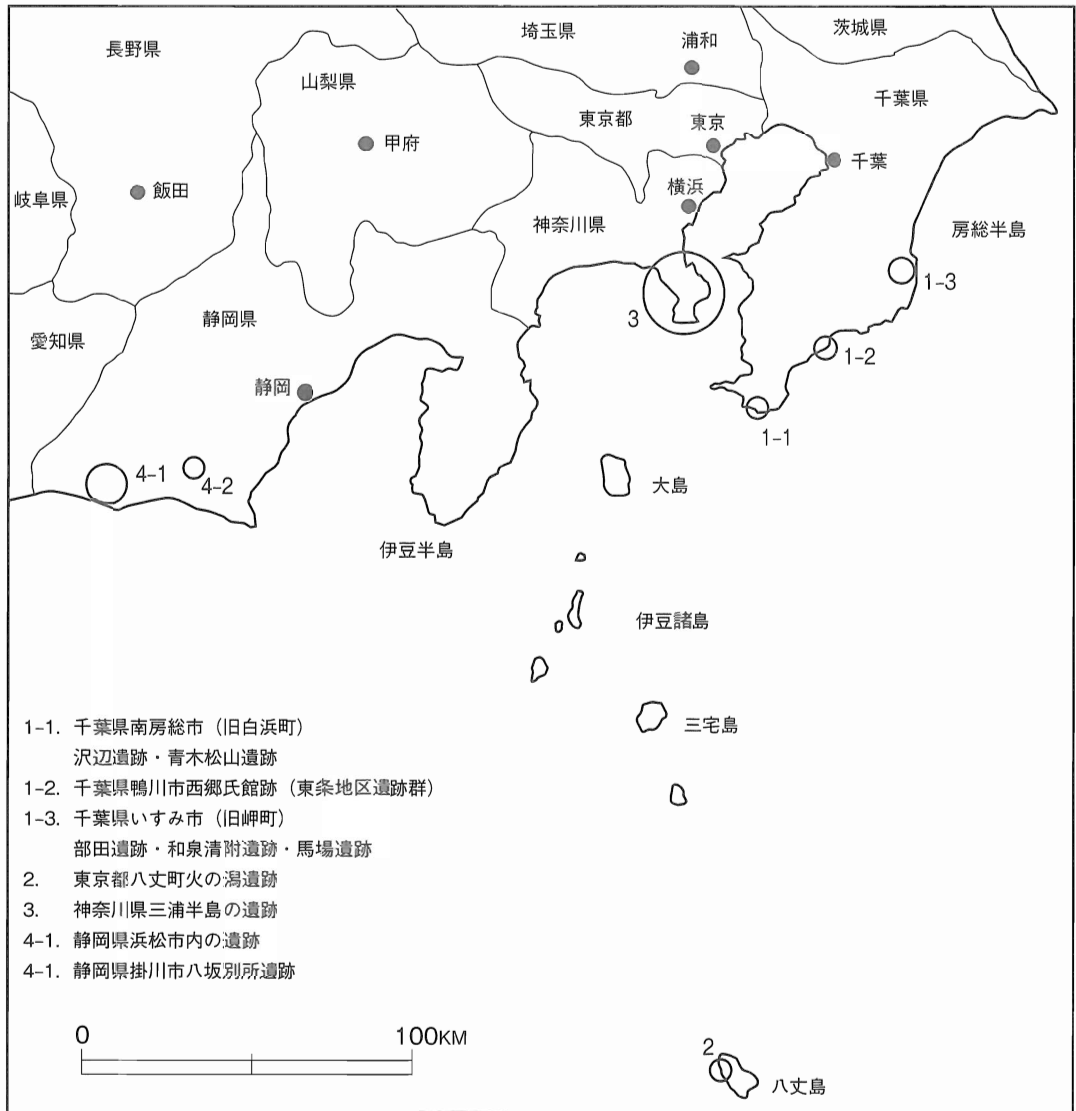


図2 製塩遺構・遺物を検出した遺跡(1/2,000,000)

湾の塩・駿河国の塩を例に示している。

内陸と海浜の交流については、塩の売買には零細な塩生産者、塩を買いあさる豪民とこれと結託する津の役人がいたこと、交流については貝や魚骨を出土したいくつかの遺跡の追跡、「日本書紀」の例、「万葉集」に固形の“堅塩”が糟湯酒の酒のつまみとして登場していること、近世では塩が商人によって売買され、江戸の仲買人筆頭の榎本弥左衛門の内容、厩牧令と塩などについて述べている。

#### 6) 山国の塩—山梨の事例から古代塩の生産・流通を考える—、森原明廣(山梨県教育委員会)

この報告は、山深い甲斐国の立地・環境・交通・考古資料から、古代塩の生産と流通を考察したものである。現在山梨県内には塩山など塩が付く地名が15箇所もあり、これについての伝承や「甲斐国志」の記載事項、南巨摩郡早川町に残る記録などから、塩泉による内陸製塩が明らかになっている。

この国の物流については、「延喜式」などの史料や出土品から、産物として、馬・皮革・布・紙・野菜・果物があり、これらによって塩や海産物を求めていた。この報告には「山梨県史」から古代産物・牧・遺物・土器・塩の往来図など15点が引用されており、関係の文献30件とともに故郷の古代史として有益なものであった。

### 3. 山梨科学アカデミーについて

#### 1) 近況

(社)山梨科学アカデミーは本誌No.55(2002)に紹介させていただいたように、平成6年に創設されいくつかの事業を活発に進めているが、21年には創始者であり後援者でもある、大村智氏(日本学士院会員・北里研究所名誉理事長・北里大学名誉教授)が会長に就任された。

また、同氏には2008年長年にわたるフランス化学者との共同研究、学术交流を通じて日本とフランスの友好を深めたこと、抗寄生虫薬イベルメクチンなどの発見・開発などの功績により、レジオン・ドヌール勲章シュバリエ章が授与される慶事があった。

本会はいくつかの事業の中で、特に科学技術の知識の啓発に力を注ぎ、「未来の化学者訪問セミナー」の訪問校を増加し、会員の講師により小・中・高20校で、自然科学からロボット技術の広範囲の講義を行なっている。

また、創立時からの山梨科学アカデミー賞本賞・奨励賞に児童・生徒科学賞を加えて、人材の育成と顕彰を図っている。

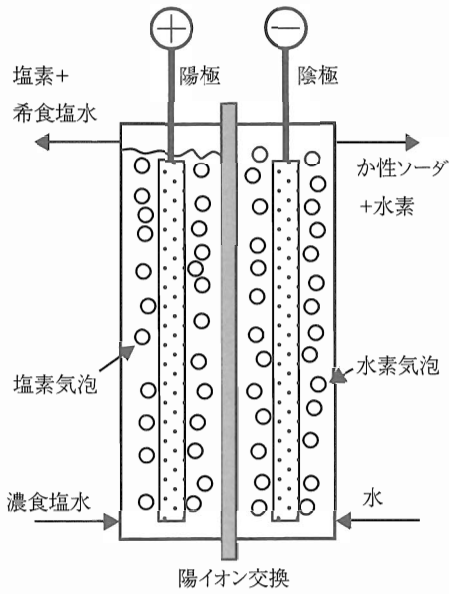
#### 2) 本賞受賞研究

はじめに述べた受賞研究は古屋長一氏(山梨大学理事)と日本ソーダ工業会との共同研究によって進められた。この省エネルギー型電解層に用いられているガス拡散電極は、1980年代に米国で盛んに研究されたが実用化に至らず、古屋氏は電気化学の基礎応用の両面で数多くの論文を発表され、多数の特許を取得されている。また、この電解層には従来の水銀法や隔膜法から、1999年に全面的に転換したイオン交換膜法が用いられているが、1972年に従来の塩田法からイオン交換膜電気透析法に全面転換した、わが国の製塩法と考え合わせて関心もたれるところである。

この方法はイオン交換膜法のニッケル陰極が電解時に水素発生を伴い槽電圧の上昇をもたらすが、この研究では陰極にカーボンブラック・PTFEを用い、銀触媒によって水素発生反応を酸素還元反応に置き換えることで、槽電圧を約1V削減できるものである。図3にイオン交換膜法食塩電解槽と酸素陰極法食塩電解槽の比較、図4にガス拡散電極の断面構造図を示す。

現在、この酸素ガス拡散電極電解槽は、2会社の電解工場に設置され順調に運転中であり、耐久性も確認されている。この方法の省電効果は水銀法に対して34%、隔膜法に対して12%で、普及による二酸化炭素削減と地球温暖化防

### 酸素陰極法食塩電解槽



### イオン交換膜法食塩電解槽

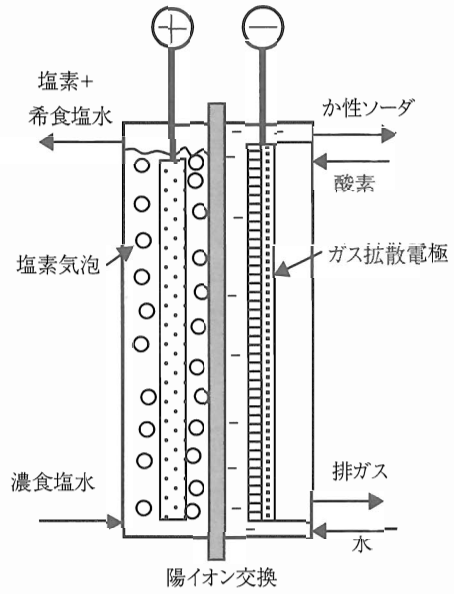


図3 イオン交換膜法食塩電解槽と酸素陰極法食塩電解槽の比較

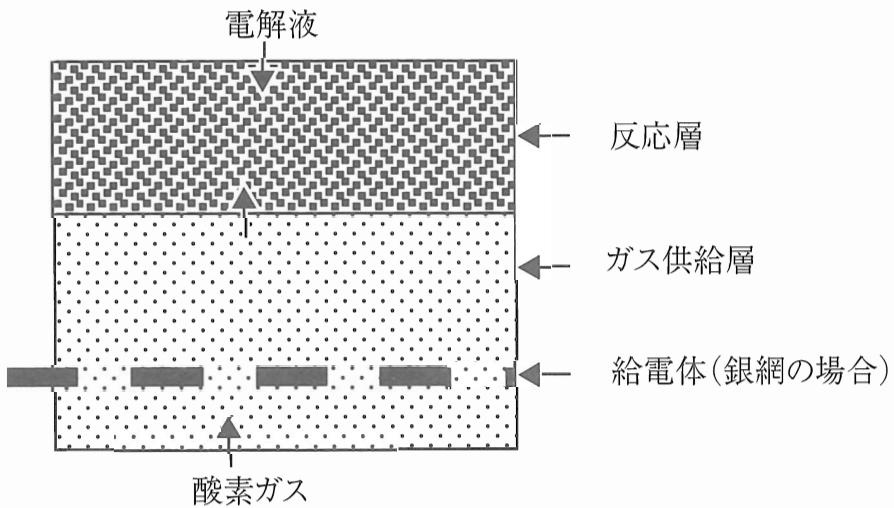


図4 ガス拡散電極の断面構造図

止効果が期待されている。

#### 4. 山梨の近況

故郷山梨は、現在リニヤ中央新幹線のルート策定、日本食の普及に合せた甲州ワインの海外進出を目指す活発な運動の展開、母校山梨大学に世界最先端の「ナノ材料研究センター」が完成し、究極のエコカーの核となる燃料電池の実用化を目指して、渡辺政廣センター長を中心に内外の研究者が研究を進めている。また、国内有数の日照時間をもつ北杜市には、国内最大規模の太陽光発電施設が建設されており、東工大は本年1月に同市明野町に30年ぶりに太陽熱発

電の新型タワー集光式実験プラントを建設する計画を発表し、海外で実用されているトラフ型の半分の発電コストを目標としている。

#### 5. おわりに

最近のエレクトロニクスの発展に伴う家電製品、携帯電話、医療などの進歩は、傘寿を迎えた筆者にもひしひしと科学技術の変革を感じさせ、今後の発展と社会への影響は晩節の関心事である。

故郷のPRも含めて粗稿を寄稿させていただいた、関係各位に謝意を表する次第である。

#### 〔資料〕

- 1)そるえんす、No. 51、27(2001)
- 2)そるえんす、No. 55、6(2002)
- 3)塩の考古学、山梨県考古学協会編、(2008)
- 4)古屋長一、山梨アカデミー会報、第28号、6(2009)



# 塩漫筆

塩車



## 『沢庵』 たくあん

### 1. 大徳寺開山と「出世・授衣」勅許<sup>1)</sup>

- 嘉暦元(1326) 後醍醐天皇の勅願で、龍宝山大徳寺開堂。(住持：宗峰・妙超)
- 元弘元(1331) 元弘の乱起る。8月、後醍醐天皇、笠置に籠る。
- 元弘3(1333) 5月、鎌倉幕府滅ぶ。6月、後醍醐帝京都に還り、建武中興成る。
- 建武元(1334) 後醍醐天皇、大徳寺を五山の上に列せられ、寺域を拡大。妙超に「正燈国師」の諡号を賜う。
- 建武3(1336) 花園上皇、妙超より印可を受ける。後醍醐天皇ひそかに吉野へ移る。(南北朝分裂)
- 建武4(1337) 8月、花園上皇、妙超に「興禅大燈国師」の号を賜う。  
12月21日、妙超、徹翁義亨(一世)に授衣。  
22日、妙超寂(56歳)
- 暦応5(1342) 関山、花園上皇の勅に応じ、妙心寺開創。
- 天授4(1378) 室町幕府(足利義満)
- 明德3(1392) 南北朝合一し、後小松天皇神器を受ける。
- 享徳2(1453) 大徳寺羅火。養叟法堂・佛殿を復興。  
養叟宗頤(二六世) …紫衣の着用勅許の始まり。
- 応仁元(1467) 応仁の乱起る。群雄割拠、戦国時代となる。

### 2. 豊臣秀吉と大徳寺 (安土、桃山時代)<sup>1)</sup>

- 天正元(1573) 足利幕府滅ぶ。
- 天正4(1576) 織田信長、安土城に入る。信長、

たくあんそうほう  
3. 沢庵宗彭 1)2)3)4)5)

内大臣に任ぜらる。

(翌年、右大臣)。信長は天皇を奉じて、天下に号令せんとす。

天正10(1582) 3月、甲斐の武田を攻滅ぼし、次いで中國の毛利氏を攻める。6月、「本能寺の変」、信長、自尽。(49歳)

10月、羽柴秀吉、大徳寺にて、信長の葬禮を行う。

12月、秀吉、総見院(古溪宗陳塔所)を建立。(十二年落成)

天正11(1583) 「賤ヶ岳の戦」で柴田勝家を破る。大坂石山に築城。(大坂城)

天正13(1585) 秀吉、関白となり豊臣の姓を賜る。(翌年、太政大臣)

秀吉、大徳寺にて大茶湯を催す。千宗易、正親町天皇より「利休居士」号を賜る。

秀吉、伊勢内・外宮の遷宮を行う。(123年振り)

天正15(1587) 秀吉、聚楽第を築造。(翌年、天皇行幸)

天正16(1588) 秀吉、母の寿塔として、大徳寺山内に天瑞寺創建。

天正18(1590) 秀吉、勅許を仰いで、小田原征伐。(秀吉の全国統一成る) 徳川家康、江戸城に入る。

文禄元(1592) 「文禄の役」朝鮮出兵。

文禄3(1594) 伏見城(桃山)成り、秀吉移る。

文禄3(1594) 秀吉、高野山・応其の願いにより、方広寺大仏殿(※)を建立。寺領二万石を与う。また、母のために高野山内に青巖寺を建立。

(※後の「鐘銘事件」につながる)

慶長2(1597) 「慶長の役」再び朝鮮出兵。

慶長3(1598) 3月、秀吉、醍醐に花見。8月、秀吉死去(63歳)

吉田神道により[豊国大明神]として祀る。

但馬國出石の人。俗姓は秋庭氏、天正元年(1573)生

天正10(1582) 地元、唱念寺の僧童となる。

天正14(1586) 宗鐘寺山内の勝福寺に入り受戒して秀喜と安名さる。

文禄元(1592) 宗鏡寺の董甫紹仲に付随して上洛し、大徳寺・三玄院の春屋宗國を拜し、宗彭と改め春屋・董甫…等に参学す。

慶長6(1601) 董甫寂す。のち南都の「俱舎論」の講席に列し、帰途泉南の大安寺に至り、文西洞仁に参ず。

慶長8(1603) 洞仁の寂後、堺・陽春寺の一凍紹滴に参じ

慶長9(1604) 8月、沢庵の道号を受く。(沢庵・宗彭)

慶長11(1606) 4月、一凍が示寂し、沢庵その後を務む。

慶長12(1607) 大徳寺の第一座に転じ、続いて徳禅寺、和泉の南宗寺に厶住し、

慶長13(1608) 3月、大徳寺の百五十三世に出世したが、本山に住すること三日で退院し、大仙・養徳の両院に居す。

慶長18(1613) 沢庵は大徳寺鬮山(1326)、『大燈國師(宗峰妙超)年譜』を編集した。

元和2(1616) 8月、但馬、宗鏡寺の復興成る。続いて、前年の「大坂夏の陣」で焼失した南宗寺の再建を進めた。

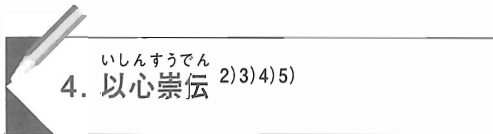
元和5(1619) 夏、南宗寺の方丈・書院完成。

元和6(1620) 宗鏡寺の後山に庵(投淵軒)を設けて陰棲し、読書三昧の生活に入る。(この時、48歳)

#### ◎南宗寺の「香の物」、貯え漬

澤庵は慶長12年(1607)、堺、南宗寺の住持となり、元和6年(1620)まで、この寺に座した。

ここで、澤庵は地元の大根を使って新しい「香の物」を創り出した。それは、乾した大根を塩・糠味噌に混ぜて、樽・桶に詰込み、上に重石をのせて漬込む。これが南宗寺の「貯え漬」であり、日々の「香の物」に供された。



江戸時代前期の臨済宗の僧侶。金地院崇伝、伝長老ともいわれる。

足利義輝の家臣、一色秀勝の子に生れたが、天正元年(1573)、室町幕府の崩壊と共に、父と死別し、京都・南禅寺に入り、玄圃霊三に師事した。

醍醐寺(真言宗)や、相国寺(臨済宗相国寺派)などにも学んだが、南禅寺金地院の靖叔徳林について、その法を継いだ。

慶長十年(1605)、鎌倉・建長寺の住取から、南禅寺の住取となり、金地院に住んだ。(この時、37歳)

慶長十三年(1608)、大御所・徳川家康に招かれて、駿府に赴き、外交文書を掌ることになった。同十五年四月、金地院に分院を駿府に設けて住むこととなった。さらに同十七年八月、家康の命をうけて、板倉勝重と共に寺社行政の事務にあたり、やがて家康の参謀として、広く政治全般にかかわるようになった。

慶長14(1609) オランダ船平戸に来たり、オランダ国王の親書と贈物を家康に献ず。家康、その返書と貿易免許の朱印状を与う。→〔オランダ貿易の始り〕

慶長17(1612) 幕府、イエズス教の禁教令を出し、宣教師の追放、教会堂の破壊、信者の改宗を迫る。

慶長18(1613) イギリスの朱印状貿易始る。

#### ◎方広寺の「鐘銘事件」

慶長19年(1614)、豊臣秀頼は、秀吉縁りの方広寺を再興した。大仏殿の鐘を新鑄し、その鐘銘に「君臣豊楽」「國家安康」と刻ませた。この鐘銘に言い掛りをつけたのが家康である。「國家安康」は[家康]の体に、[安]の一字を入れて分断し([家《安》康])、家康を害するものだと詰問状(崇伝筆)を秀頼に呈し、「鐘銘事件」となった。

この「鐘銘事件」を口実にして、徳川勢は11月、大坂城に攻め寄せたが、城堅くして抜けず、12月和議を結んだ。〔大坂・冬の陣〕

開けて元和元年(1615)春、家康大坂城の内濠を埋む。これに抗議して、5月「大坂・夏の陣」となり、ついに大坂城は落城、豊臣氏は滅亡した。

元和元(1615) 5月、「大坂・夏の陣」を制した幕府は、「武家諸法度(十三条)」、「禁中並公家諸法度(十七条)」、「諸宗本山本寺諸法度」を発令。特に大徳寺と妙心寺に厳しい条件を付す。

- (1) 住取の資格年数…30年
- (2) 紫衣(※)の着用…従来、天皇が令したが、幕府の許可とす。

元和2(1616) 家康死す。(75歳)。「東照大権現」(天海)

欧船との貿易を平戸・長崎の二港に制限。

元和4(1618) 江戸芝に金地院を設けて住す。

元和5(1619) 9月、僧録に任ぜられ、禅院行政の実権を握った。

寛永3(1626) 10月、後水尾天皇から円照本光国師の諡号を賜わる。

金地院崇伝は、將軍秀忠の最高顧問として幕政の枢機に参与し、[黒衣の宰相](※)と称された。



(※)<sup>6)</sup>

：〔緇<sup>しえ</sup>〕しえ(呉音)：黒染の衣、僧衣。  
 〔緇(黒衣)・宰相〕：僧侶の身で天下の政権に参画する者。宋の慧琳道人の渾名。…(資治通鑑、宋文帝紀)  
 ：〔紫衣<sup>しえ</sup>〕しえ(呉音)：もと君主の衣。  
 〔紫衣〕 紫色の袈裟

## 5. 紫衣事件<sup>1)2)3)</sup>

大徳寺の住持出世は、開山大燈國師以来(1337)、天皇の勅許(綸旨)で執行され、養叟(二六世)の頃(1453)から、大徳寺の住持は紫衣の着用を勅許されていた。…「出世・紫衣着用」勅許。

元和元年(1615)、幕府から「住取・紫衣の勅許」の規正令があったが、勅許の執行に変わりなく推移した。

寛永3年(1626)、後水尾天皇は、金地院崇伝に「円照本光國師」という國師号を賜った。これが、却って、「紫衣の勅許」規正令の執行へと進んだ。

寛永4年(1627)、大徳寺の正隠宗知(一七二世)紫衣勅許さる。幕府、これを規正令違反として摘発し、「紫衣事件」となる。

寛永5(1628) 「紫衣事件」起る。元和元年以後に住取となった者、全てから紫衣着用の資格を剥奪する。  
 大徳寺…玉室(147世)、澤庵(153世)、江月(156世)  
 妙心寺…東源、単伝

寛永6(1629) 幕府(前將軍秀忠、僧録司崇伝)は、玉室、澤庵、江月らを江戸に召して詰問し、澤庵らは寺法

を説いて弁明したが許されず、7月玉室、澤庵等は流罪となった。(江月：流罪に及ばず) 玉室(陸奥・棚倉に流配)、澤庵(出羽・上の山) 東源(津軽)、単伝(出羽の由利) 11月、紫衣勅許した後水尾天皇は退位す。

將軍家光の計らいで流罪を免宥された江月は、大徳寺に歸ったが、翌寛永七年江戸に赴き、幕府の要人に澤庵、玉室二老の赦免運動を進めたが叶わず、そのまま、八年、九年と江戸に滞留して、赦免活動に専念した。

寛永九年正月、前將軍秀忠逝去(54歳)もあって、7月、澤庵、玉室等の流罪恩赦が令せられ、江戸へ戻された。8月、澤庵と玉室は江戸・神田の広徳寺に寓した。

寛永10年(1633)正月、金地院崇伝寂(65歳)。

この“恩赦” 処分を担当したのが、大目付・柳生但馬守宗矩であった。宗矩は広徳寺の澤庵に参じ、教えを請うに至った。

寛永11年、「紫衣事件」落着し、6月、澤庵は5年振りに宗鏡寺に帰宅した。

寛永12(1635) 將軍家光の顧問役として江戸に招聘され、柳生宗矩の麻布別邸に仮寓す。

寛永13(1636) 江戸住の玉室と澤庵、紫野の大徳寺に帰り、江月の龍光院に入り、三師打ち揃って、12月22日「大徳寺開山大燈國師三百年遠忌」勤修す。

寛永14(1637) 4月、台命を受けて江戸に戻り、麻布の檢東庵に居す。

寛永18(1641) 大徳寺と妙心寺の「出世・紫衣勅許」回復された。

寛永18(1641) 玉室 寂(70歳)

寛永20(1643) 江月 寂(70歳)

## 6. 沢庵、東海寺の開祖となる<sup>2)3)</sup>

将軍家光は、沢庵に深く帰依し、寛永15年(1638)、江戸品川に東海寺を創建し、沢庵をその開祖に請じた。この時、後水尾上皇は、沢庵に國師号を賜らんとしたが、沢庵はこれを辞退し、第一祖の徹翁和尚に下し賜らんことを請うた。上皇は「天応大現國師」の号を徹翁義亨に贈られた。寛政16年3月、東海寺完成し、沢庵はこれに座した。

家光公は、江戸城内に沢庵和尚の休憩邸を与えた。

寛永18(1641) 酒井忠勝、東海寺山内に長松院を構え、細川光尚は父忠利菩提のため妙開院を開く。

寛永20(1643) 後山から水を引いて池を作り、

祠堂・幽石の庭園とす。

正保元(1644) 小出吉親、東海寺山内に雲竜院を構う。こうして宏大な東海寺となった。

正保2(1645) 12月11日、沢庵は遺偈に「夢」の一字を残して寂した。(73歳)東海寺後山に葬った。

### ◎「沢庵漬」

将軍家光公は、江戸城内に沢庵の休憩邸を与えて招聘し、また屢々東海寺に来駕して和尚と歓談した。

家光公が東海寺でお膳を供された折、沢庵は「禅寺ゆえ、何もございませんが、手前が作りました“貯え漬”であります」と、例の「香の物」を差し出した。家光はすかさず、「“貯え漬”ではなくて、“沢庵漬”であろう」といった。

以来、江戸では「沢庵漬」と呼ばれるようになった。



沢庵禅師之墓

### 〔参考文献・資料〕

- 1) [古寺巡礼. 京都. 16. 大徳寺]  
有吉佐和子・小堀南嶺 編、  
淡交社、昭和52(1977)
- 2) 「心にしみる名僧名言逸話集」  
松原哲明監修、講談社発行(1993)
- 3) 「日本近世人名辞典」吉川弘文館(2005)  
竹内誠、深井雅海編集
- 4) 「日本・歴史・人物事典」朝日新聞社(1994)
- 5) 荻生待也編集「日本人名関連用語大辞典」  
遊子館(2008)
- 6) 大規文彦「大吉海」富山房出版(昭和10)
- 7) 児玉幸多「標準：日本史年表」  
吉川弘文館(1966)

## 第2回理事会・第2回評議員会を開催

去る3月16日(火)、当財団の第2回理事会及び第2回評議員会が、東京都千代田区のアルカディア市ヶ谷(私学会館)において開催されました。

理事会では、公益財団法人移行後の諸規程の承認、会計監査人の報酬等の承認、事務局長の選任が審議され、いずれも原案どおり承認されました。

評議員会では、2名の評議員の補欠選任、任期満了となっていた全理事の選任、役員及び評議員の報酬等に関する基準について審議が行われ、いずれも原案どおり承認されました。



第2回理事会

## 第3回理事会・第3回評議員会を開催

去る3月16日(火)、当財団の第3回理事会及び第3回評議員会が、東京都千代田区のアルカディア市ヶ谷(私学会館)において開催されました。

理事会では、第2回評議員会において選任された理事の中から、代表理事(理事長)及び業務執行理事(専務理事)が選定されたほか、次期研究運営審議会委員及び研究顧問の委嘱案、第2期(平成22年度)事業計画、同収支予算案、第4回評議員会の開催について審議が行われ、いずれも原案どおり承認されました。

評議員会では、第3回理事会において承認された議案内容についての報告が行われました。



第3回評議員会

(注)公益財団法人移行後の第1回理事会については、旧法人最終決算の承認等について、定款第42条に基づく決議の省略により2月1日に、また第1回評議員会については、同決算の報告等について、定款第26条に基づく報告の省略により2月10日に、それぞれ終了しております。

## 第2期(平成22年度)事業計画

1. 塩及び海水に関する科学的調査・研究の助成  
一般公募研究49件、プロジェクト研究10件(2テーマ)に総額7千万円の助成を行う。
2. 情報の収集及び調査研究
3. 情報誌等の発行
4. シンポジウム、研究会、講演会の開催
5. 関係学会との協力等
6. 広報活動の充実

## 評 議 員

平成22年3月16日現在

〈任期〉 開始：平成21年12月1日(新任の評議員は平成22年3月16日)  
満了：平成25年12月1日までに終了する事業年度のうち最終のものに関する定時評議員会の終結の時

荒井 綜一	東京農業大学総合研究所客員教授
植岡 佳樹	株式会社日本海水代表取締役会長
沖 仁	日本塩回送株式会社相談役
熊谷 博	日本食塩製造株式会社代表取締役社長
畷口 悦藏	全日本塩販売協会会長
津田 健	東京工業大学ものづくり教育研究支援センター特任教授
※西野 和博	財団法人塩事業センター副理事長
能間 博司	ダイヤソルト株式会社代表取締役社長
※宮崎 勝彦	鳴門塩業株式会社代表取締役社長
宮澤 啓祐	塩元売協同組合理事長
村上 正樹	日本ソーダ工業会専務理事
森高 初恵	昭和女子大学大学院教授

(五十音順)

(注)※印は新任の評議員

# 役員

平成22年3月16日現在

## 【理事】

〈任期〉 開始：平成22年3月16日

満了：平成24年3月16日までに終了する事業年度のうち最終のものに関する定時評議員会の終結の時

理事長	小村 武	
専務理事	池田 勉	
理事	石坂 誠一	富山国際大学名誉学長
理事	大矢 晴彦	横浜国立大学名誉教授
理事	金子 収	日本醤油協会専務理事
理事	杉田 賢一	塩元売協同組合専務理事
理事	永井多恵子	財団法人せたがや文化財団副理事長
理事	※横堀 明	社団法人日本塩工業会専務理事
理事	吉本 修二	今川橋法律事務所弁護士

## 【監事】

監事 西名 武彦 株式会社みずほ銀行常務執行役員

〈任期〉 開始：平成20年5月21日

満了：平成24年5月21日までに終了する事業年度のうち最終のものに関する定時評議員会の終結の時

監事 諸橋 基之 元日本たばこ産業株式会社監査役

〈任期〉 開始：平成20年3月14日

満了：平成24年3月14日までに終了する事業年度のうち最終のものに関する定時評議員会の終結の時

(五十音順)

(注)※印は新任の理事

## 研究運営審議会委員及び研究顧問

任期：平成22年4月1日～平成24年3月31日

平成22年4月1日現在

委員(食)	阿部 啓子	東京大学大学院特任教授
委員(医)	岡田 泰伸	自然科学研究機構生理学研究所長
委員(工)	越智 信義	社団法人日本塩工業会技術委員会委員長
委員(食)	香西みどり	お茶の水女子大学大学院教授
委員(食)	木村 修一	昭和女子大学特任教授
委員(農)	蔵田 憲次	元東京大学大学院教授
委員(農)	小林 達彦	筑波大学大学院教授
委員(工)	柘植 秀樹	慶應義塾大学名誉教授
委員(工)	中尾 真一	工学院大学工学部教授
委員(農)	林 良博	東京農業大学大学院教授
委員(医)	菱田 明	元浜松医科大学教授
委員(医)	森田 啓之	岐阜大学大学院教授
研究顧問(医)	今井 正	自治医科大学名誉教授
研究顧問(工)	豊倉 賢	早稲田大学名誉教授
研究顧問(食)	藤巻 正生	東京大学名誉教授

# 平成22年度助成研究を決定

— 59件を採択 —

去る2月23日(火)に東京都千代田区・KKRホテル東京で開催された第44回研究運営審議会において平成22年度の助成研究について選考が行われ、この結果に基づき前述の理事会において、一般公募研究49件、プロジェクト研究2テーマ・10件の合計59件が決定されました。研究分野別助成費及び助成研究一覧は次のとおり。

平成22年度研究分野別助成費

	研究分野	区 分	課題数(件)	助成費(千円)
一 般 公 募 研 究	理 工 学	A	5	9,300
		B	10	8,700
		計	15	18,000
	農学・生物学	A	2	3,800
		B	8	7,100
		計	10	10,900
	医 学	A	3	5,400
		B	9	8,300
		計	12	13,700
	食品科学	A	3	5,100
		B	9	8,500
		計	12	13,600
	全研究分野 合 計	A	13	23,600
		B	36	32,600
		合 計	49	56,200
プ ロ ジ エ ク ト 研 究	農学・生物学	P	4	5,600
	医 学	P	6	8,200
	全プロジェクト	計	10	13,800
全 課 題	総 計		59	70,000

平成22年度助成研究一覧

助成番号	表 題	氏 名	機関・所属・役職
一般公募研究:理工学分野			
1001	電気伝導度による各種晶析現象の制御法の確立～NaCl水溶液からの核生成、生長、不純物効果の解明～	朝熊 裕介	兵庫県立大学大学院工学研究科 准教授
1002	海水中に固定化された炭酸塩を燃料としたメタノール生成機能を持つ光駆動型酵素電池	天尾 豊	大分大学工学部 准教授
1003	膜透過高濃度塩水から有価な資源物質の分離・回収に関する研究—省エネルギーにおけるマグネシウム製錬技術の開発—	池田 進	佐賀大学総合分析実験センター 技術専門員
1004	水害被災した紙文化財の海水を利用した緊急保存処置法の開発	江前 敏晴	東京大学大学院農学生命科学研究科 准教授
1005	カルボキシメチル化ポリエチレンイミン型キレート樹脂を用いる海水および塩製品中微量元素の固相抽出分離／定量法の開発	加賀谷重浩	富山大学大学院理工学研究部 准教授
1006	塩化物イオンに高い選択性を有する人工アニオンレセプターの構築	近藤 慎一	山形大学理学部 准教授
1007	固定化海洋性微細藻類による配糖化を利用したバイオレメディエーションに関する研究	下田 恵	大分大学医学部 准教授
1008	海水中の重金属の溶存状態の解明を目的とした、キャピラリー電気泳動とESI-MSとの接続による1価、2価および3価の金属イオンの相互分離に関する測定方法の開発	高橋(田中) 美穂	東京海洋大学海洋科学部 准教授
1009	乾湿繰り返し腐食環境における高強度鉄鋼材料の水素脆化機構の解明	多田 英司	秋田大学工学資源学部 准教授
1010	風と太陽熱を効果的に利用する海水濃縮器の開発	野底 武浩	琉球大学工学部 教授
1011	イオン交換膜の膜汚染機構の解明と高い耐膜汚染性を有する膜の開発	比嘉 充	山口大学大学院理工学研究科 教授
1012	光触媒併用型マイクロバブルによる汚染海水浄化法の開発	平川 力	産業技術総合研究所環境管理技術研究部門 研究員
1013	キャピラリーゾーン電気泳動法による海水中栄養塩類同時定量法の開発	福士 恵一	神戸大学海事科学研究科 教授
1014	塩化ナトリウムおよび関連する塩を用いた超高感度定量状態分析法の開発	二又 政之	埼玉大学大学院理工学研究科 教授
1015	海水からの有価資源回収のための高分子擬似液膜の創成	吉川 正和	京都工芸繊維大学大学院生体分子工学専攻 教授
一般公募研究:農学・生物学分野			
1016	ラフィノース属オリゴ糖の合成による作物の塩・乾燥ストレス耐性増強法の開発	井上 真理	九州大学大学院農学研究院 教授
1017	Na膜輸送体の機能解明にもとづく耐塩性微生物・植物創出に向けた基盤研究	魚住 信之	東北大学大学院工学研究科 教授
1018	トマトの炭素代謝から見たC/N分配における塩ストレスの影響	大河 浩	弘前大学農学生命科学部 准教授
1019	浸透圧調節に関わる転写因子の効率的利用による耐塩性植物の分子育種技術の開発	上中 弘典	鳥取大学農学部 准教授
1020	高度好塩性古細菌由来キチナーゼの耐塩機構の解明および耐塩性のさらなる向上	中村 聡	東京工業大学大学院生命理工学研究科 教授
1021	海草アマモの耐塩性に関与する遺伝子を用いた耐塩性植物の作出	福原 敏行	東京農工大学大学院共生科学技術研究院 教授
1022	植物の塩ストレス耐性を増強するカチオン結合タンパク質と液胞機能に関する分子生理学的研究	前島 正義	名古屋大学大学院生命農学研究科 教授
1023	イオンバランス是正による塩蓄積型耐塩性植物の機構解明	三浦 謙治	筑波大学大学院生命環境科学研究科 助教
1024	塩ストレスによるイオンチャネルの酸化と酸化抑制による耐塩性の向上	村田 芳行	岡山大学大学院自然科学研究科 教授
1025	ミネラル塩給与がミヅバチ群の増殖性に与える影響	芳山三喜雄	農業・食品産業技術総合研究機構 畜産草地研究所 研究員

助成 番号	表 題	氏 名	機関・所属・役職
一般公募研究：医学分野			
1026	肥満患者におけるWNKキナーゼを介した塩分感受性高血圧メカニズムの解明	内田 信一	東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科 准教授
1027	時計遺伝子欠損に伴う食塩感受性高血圧マウスにおける病態解析および新規治療法の開発	江本 憲昭	神戸薬科大学薬学部 教授
1028	マグネシウムによるパーキンソン病の予防・治療効果に関する研究：モデルマウスへの投与を通して	小柳 清光	東京都医学研究機構東京都神経科学総合研究所 運動・感覚システム研究分野長、参事
1029	心臓の酸化ストレスにおけるカリウムイオンの役割	黒川 洵子	東京医科歯科大学難治疾患研究所 准教授
1030	小腸Na <sup>+</sup> 代謝と栄養素吸収におけるタイト結合部の役割	鈴木 裕一	静岡県立大学食品栄養科学部 教授
1031	TRICチャネル欠損高血圧における食塩感受性	竹 島 浩	京都大学大学院薬学研究科 教授
1032	腸管ナトリウム依存性リン酸トランスポーターのリンセンサーとしての分子動態	辰巳佐和子	徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部 助教
1033	食塩感受性高血圧における新規アンジオテンシン受容体結合因子の病態生理学的意義についての検討	田村 功一	横浜市立大学医学研究科 准教授
1034	圧負荷心肥大における食塩感受性亢進を介した交感神経系活性化による心不全発症・進展の新規脳内分子機構の解明及び治療戦略の開発	廣岡 良隆	九州大病院循環器内科 講師
1035	クロライドイオン輸送体活性化による神経突起伸長促進機構の解明	丸中 良典	京都府立医科大学大学院医学研究科 教授
1036	食塩感受性高血圧の発症機構と病態解析に関する研究－酸化ストレスおよびシグナル分子ASK1を中心にして－	山本英一郎	熊本大学医学部付属病院 特任助教
1037	慢性腎臓病で塩分がプロレニンの受容体蛋白を介する腎組織RAS活性に及ぼす影響	山本 龍夫	浜松大学健康プロデュース学部 教授
一般公募研究：食品科学分野			
1038	食品由来の酸性バイオポリマーによる食塩吸収抑制効果の解析とその応用	朝倉 富子	東京大学大学院農学生命科学研究科 特任准教授
1039	マグネシウム欠乏におけるカルシウム過剰の栄養生理学的・病理組織学的検索	池田 尚子	昭和女子大学生活科学部 専任講師
1040	成長過程における塩分摂取量の制限が味覚神経回路の発達に及ぼす影響	池永 隆徳	兵庫県立大学生理学研究科 特任助教
1041	にがり成分の生体内代謝吸収過程の簡便イメージング法の開発：ナノ粒子型蛍光プローブによるにがり成分のイメージング	榎本 秀一	岡山大学大学院医歯薬学総合研究科 教授
1042	魚肉中のイノシン酸分解酵素活性と塩漬魚肉の乾燥中に起こるイノシン酸の分解速度に及ぼす食塩の影響	大泉 徹	福井県立大学海洋生物資源学部 教授
1043	嗜好性を加味した塩味の特性評価法の開発とその利用	日下部 裕子	農業・食品産業技術総合研究機構食品総合研究所 ユニット長
1044	でんぶんの糊化進行におよぼす静電的相互作用の寄与	佐藤 之紀	県立広島大学生命環境学部 准教授
1045	カルシウムと乳成分によるメタボリックシンドローム予防改善作用に関する研究	長岡 利	岐阜大学応用生物科学部 教授
1046	食品タンパク質中の水の挙動に対する塩の影響	中川 洋	日本原子力研究開発機構量子ビーム応用研究部門 研究員
1047	塩蔵食品における好塩性食中毒原因細菌腸炎ビブリオに関する研究	中口 義次	京都大学東南アジア研究所 助教
1048	水産物由来耐塩性乳酸菌 <i>Tetragenococcus halophilus</i> の食品機能性に関する研究	永瀬 光俊	島根県産業技術センター浜田技術センター 専門研究員
1049	炭水化物食材中の塩類の二元収着拡散	齋場 浩子	東京聖栄大学健康栄養学部 准教授



助成番号	表 題	氏 名	機関・所属・役職
<b>農学・生物学分野プロジェクト研究：作物栽培に及ぼす海水の影響</b>			
10B1	海水に由来する栄養塩類の農地への自然供給量評価―「塩益」の定量的評価	中西 康博	東京農業大学国際食情報学部 准教授
10B2	希釈海水を用いたニホンナシ、リンゴ栽培方法の確立～耐塩性台木の選抜とそのメカニズムの解明～	松本 和浩	弘前大学農学生命科学部 助教
10B3	海水・食塩水を利用した果樹(ナシ)の落葉促進技術の開発～実用的効果の検証と植物体への影響解明～	松本 辰也	新潟県農業総合研究所園芸研究センター 主任研究員
10B4	塩ストレスによる植物病原菌の抑制	篠原 信	農業・食品産業技術総合研究機構 野菜茶業研究所 主任研究員
<b>医学分野プロジェクト研究：生体におけるK<sup>+</sup>輸送とその制御機構</b>			
10C1	腸管でのK <sup>+</sup> 吸収・排泄機構とその制御	桑原 厚和	静岡県立大学大学院環境科学研究所 教授
10C2	腎遠位尿細管K <sup>+</sup> チャネルの機能発現制御機構の解明	種本 雅之	東北大学病院腎高血圧内分泌科 講師
10C3	腎尿細管のK <sup>+</sup> 分泌とK <sup>+</sup> チャネル	河原 克雅	北里大学医学部 教授
10C4	カリウム過剰摂取によるインスリン抵抗性改善作用とその作用機序の解明についての研究	佐藤 博亮	福島県立医科大学内科学第三講座 講師
10C5	膵β細胞におけるK <sub>v</sub> チャネルによるインスリン分泌制御機構の解明	出崎 克也	自治医科大学医学部 講師
10C6	電位依存性及びカルシウム活性化カリウムチャネルの多様な生理機能と病態的意義	大矢 進	名古屋市立大学大学院薬学研究科 准教授

## I. ソルト・サイエンス・シンポジウム 2010

### 1. 開催目的

目的：塩に関する学術、その他の情報普及と啓発

対象者：食品関連企業関係者、塩事業関係者、大学等研究機関関係者、  
栄養士、調理師、給食関係者、一般参加者 300人程度

### 2. 開催日時・場所

開催日：平成22年9月28日(火)13:00～16:40

開催場所：早稲田大学国際会議場井深大記念ホール

### 3. テーマと演題

(1)テーマ 塩と健康

(2)演題

#### ①スポーツと水・電解質代謝

講演者：鈴木 政登 東京慈恵会医科大学教授

座長：木村 修一 昭和女子大学特任教授

#### ②食塩感受性高血圧と腎カリクレイン-キニン系

一食塩の過剰摂取で高血圧になる？その仕組みと防御装置—

講演者：鹿取 信 北里大学名誉教授

座長：今井 正 自治医科大学名誉教授

#### ③調理と塩の科学

講演者：小竹 佐知子 日本獣医生命科学大学准教授

座長：島田 淳子 昭和女子大学特任教授

## II. 第4回理事会・第4回評議員会(平成22年5月24日(月)KKRホテル東京)

第1期事業報告及び収支決算などの審議が行われる予定です。

## III. 第22回助成研究発表会(平成22年7月20日(火)都市センターホテル)

平成21年度の助成研究の成果が発表されます。

## IV. 「助成研究報告書」等発行(平成22年3月)

平成20年度の助成研究69件の成果をまとめた「助成研究報告書」(3分冊)を発行しました。

## 編集後記

公益財団法人に移行してはじめての理事会・評議員会を3月16日に開催いたしました。前日になって突然、予定していた会場が使用できないという前代未聞の連絡が入りましたが、なんとか別の会場で無事終えることができました。公益財団法人への移行により、年度途中の12月から新事業年度が始まり、理事の選任手続きや移行にあたっての諸手続きなど議案が多く、従来よりも説明時間が必要となり、理事・評議員の皆様にはご多忙の中、余分な時間をいただくことになりました。お蔭さまで必要とされた手続きをすべてご審議いただき、公益財団法人としての体制を整えることができました。あわただしく過ぎた2009年度でしたが、公益財団法人への移行を果たした充実した年度でもありました。これで名実ともに新体制で新年度が迎えられます。今後とも皆様方のご支援・ご鞭撻をお願い申し上げます。

(池)

MARCH / 2010 / No.84

発行日

平成22年3月31日

発行

公益財団法人ソルト・サイエンス研究財団  
The Salt Science Research Foundation

〒106-0032  
東京都港区六本木7-15-14 塩業ビル

電話 03-3497-5711

FAX 03-3497-5712

URL <http://www.saltscience.or.jp>